

# 【特集】 明日への備え

自然災害が多発しています。これまでの「想定」を超える災害にどう向き合い、自分たちの住む地域、自分のいのちをどのように守っていくか……。今号では、地域防災に取り組む人びとを紹介するとともに、災害への危機管理と防災教育にお力を注がれている片田敏孝さん（東京大学特任教授）のインタビュー、インクルーシブ防災について立木茂雄さん（同志社大学教授）にお話をうかがいました。



# 防災とは、いのちを思い合うこと

片田敏孝さん（東京大学特任教授）

家族みんなのいのちを守るのは「信頼」と「絆」なのです。

—日本の防災の現状についてお聞かせください。

日本の防災の歴史を振り返ると、1959年の伊勢湾台風で5千人以上の方が亡くなりました。もはや先進国の体をなしていない状況でした。それで「これではいかん」と、伊勢湾台風を契機にできた「災害対策基本法」が日本の防災の骨格をなしています。では、そこになんと書かれているかというと、3条が「国」、4条が「都道府県」、5条は「市町村」に対して、「それぞれ国民のいのちを守る責務を有する」と書かれています。ですから、その基本法ができてからは、日本の防災は行政主体が進められるようになり、自然災害死は激減しています。

ところが、行政主導の防災を進めてきたことで、国民の意識の中に当事者意識が薄れてしまったというマイナス面が見えてきたのです。避難勧告が出て逃げたこともせず、ハザードマップを配っても見ない人たちが増えてしまいました。いまになって、国民に「主体性をもちなさい」「防災意識を高くもってください」とお話ししても、長年

積み重ねられてきた意識を変えていくことは、非常に難しい課題だと感じています。

実は、新潟豪雨のときにこのようなことがありました。平屋建ての家で独りで暮らしていた高齢者の女性が、床上浸水になり逃げ遅れてしまったのです。後日、調査に行った私は、「おばあちゃん、なんで逃げなかったの？」と聞きました。すると、「逃げないといかんと思ったので、隣家の自主防災会の会長さんのところに『避難勧告でた？』って聞きに行ったら『まだだ』と言われた。『避難勧告でたら教えてね。そしたら逃げるから』と言って家に戻ったのよ」と言うのです。しかし、避難勧告より先に川が氾濫したという話が伝わってきて、また隣家に行つて『避難勧告でた？』と聞いたら『まだ』と言うので家に戻ったから逃げ遅れたというのです。避難勧告がなかったから「逃げなかった」というのは残念です。しかし、これが日本の防災意識の現状なのです。

—どのようにして意識を変えていくことができますのでしょうか。

東北地方には、「津波でんでんこ」という言葉があり、東日本大震災後からよく使われるようになりました。津波のときは、高齢者も子どもも

誰もが他人に構わずでんでんばらばらに逃げなさいということ。しかし、私は、この「津波でんでんこ」が求めていることについて、このように理解しています。

それは、高齢者も子どもも、みんな一人ひとりが自分のいのちに責任をもつこと。そして、一人一人が自分のいのちに責任をもつことを家族で確認し、お互いが信頼し合い、「うちの子は必ず逃げていく」という信頼があれば、とにかく自分も逃げて、必ずあとで迎えに行こうと気持ちになれます。ですから、家族みんなのいのちを守るのは「信頼」と「絆」なのです。そうした信頼し合える関係を事前に家族や近所の方とつくっておくことが大切だと思います。これがあってこそ「津波でんでんこ」が実行可能になるのです。

そして、防災でもう一つ大切なことは、「みんなで助かる」ということです。自分のいのちが危うい状況になったとき、人は大切な人のことを考えます。その大切な人のことを考えたとき、不思議と行動がとれるのです。

昨年の九州北部豪雨のあと、私は政府の調査団として現場に入り、住民の方々に聞き取りをさせていただき、朝は晴れていて、天気予報でも報らされていないにもかかわらず、突然、雨が降り出したというのです。自分の集落の山のほうを見ると、黒雲がかかって下は真っ白になっている。「これはまずい」と思った青年はすぐに村に引き返し、足腰もおぼつかない隣家の独り暮らしのおばあちゃんを避難所に連れていったという話しを聞きました。なぜ、戻ったのか……。それは、青年はおばあちゃんに子どもがいるかわいがつてもらっていたからです。だから、「おばあちゃんを助けるのは誰？」「それは僕だ」という

気持ちがあわき起こったのでしょう。大事な人のことを思うと自分の行動をも速め、対応に繋がっていくということなのです。

「防災」は、災害からいのちを守ることが基本で、人の心に寄り添うところがないと実効性がないことをさまざまな調査をしてきたなかで実感しているところ。です。

自分のいのちを守ることで、

他人の命も救える。

—いま、私たちが「備える」ことは？

「防災」とは、単に防災意識を高めて「逃げる！逃げる！」という話でも災害に対する処方箋として技術を普及することでもないのです。自分のい



片田敏孝（かただ としたか）

1960年、岐阜県生まれ。東京大学特任教授。群馬大学名誉教授。災害への危機管理対応、防災教育等の研究と共に防災活動を全国各地で展開。特に2004年から釜石市の児童・生徒を中心に津波防災教育に取り組み、災害に立ち向かう主体的姿勢の定着を図ってきた。著書に『人が死なない防災』（集英社新書）『子どもたちに「生き抜く力」を一釜石の事例に学ぶ津波防災教育』（フレール館）ほか多数。

とに与ってはとも辛いことです。から、「ぜったいに犠牲者をださない」という強い思いをもつこと。です。

そうした気持ちの訓練を家族や地域、学校、職場でしていくことが、何よりの備えではないかと思えます。

誰も自分が死ぬとは思わない。みんなが逃げないない僕も逃げない——そんな気持ちはダメです。誰かが口火を切つて「逃げよう」と言えば、周りのみんなも逃げるんですね。

最初に逃げることは勇気が必要です。でも、率先者になったなら、まわりのみんなをも助けることができることを忘れないでください。つまり、自分のいのちを守ることで、他人のいのちも救えるのです。

さらに私は、体の不自由な方や高齢者の方に「助けられるように努力することが大事だよ」とお話ししています。

それは、東日本大震災のときに、釜石や大槌町の消防団の方は責任感が強く、「わしは逃げん」というお年寄りを最後の最後まで説得するなかで、共にいのちを落とされた方がいました。また、「自分が助けにいかなかったばかりに亡くなつてしまった」という思いに、いまださいなまれている消防団の方がいます。ですから、高齢者や歩行困難な方は、這つても玄関まで行つて「私はここにいます」という努力をしていただきたいのです。自分ができるところまで精いっぱいやってみてください。

自然に向き合うべき姿というのは、あらゆる災害に共通します。みんなが手を携えて取り組んでいくことで、かならずよりよい防災を成就できると私は信じています。